



やまゆり

学校だより

令和6年1月11日
73号
学校長 杉本賢二

校訓 「和の心」
学校教育目標 「社会に貢献しながら自立する生徒の育成」 一気づき・考え・実行するー
校内研究重点 「個別最適な学びと協働的な学びで、主体的に学習する生徒を育成する」

学校教育目標 「社会に貢献しながら自立する生徒の育成」 一気づき・考え・実行するー

3学期の「始業式」をしました

昨日1月10日(水)に始業式をしました。節目を大切にし、決意を新たに努力する気持ちが伝わる素晴らしい態度でした。特に、各学年代表のことは、冬休みの生活や学習、今後の行事、進路等に関する思いが伝わるとても良い発表でした。全員の努力で創り上げた式は貴重です。

1年代表 愛維さん 2年代表 杏奈さん 3年代表 雅也さん 聞く態度の良さ



司会・講評等をした高村先生 生徒指導主事三浦先生



賞状伝達 桜愛さん



若鮎祭直前の生徒の団結の様子

- ① 自分なりの精一杯の努力
- ② 友人から認められる
- ③ 嫌な事がない
- ④ 孤立しない

学校教育目標重点 「豊かな心の育成」

「チャン・ジーン先生」をお迎えし、英語の学習をします

2学期まで指導して頂いたメヒア先生に変わって、3学期から英語の指導の先生として「チャン・ジーン」先生をお迎えしました。出身はアメリカのアイダホ州で、日本に来る前は「アイダホ州の政府の仕事」をしていたというキャリアをもっています。来日して9年なので、ある程度日本のことも理解しています。3月までご指導して頂けることになりましたので、この縁を生かして勉強や国際的な学びを推進したいと思います。

ジーン先生が指導して下さることにおいては、村や教育委員会に大変ご苦勞を頂きました。ありがとうございました。

昨日の始業式前に千葉教頭から全校生徒に紹介 ジーン先生の自己紹介



学校教育目標重点 「豊かな心の育成」

ALTのメヒア先生とのお別れ会をしました

2年以上指導して頂いた、メヒア先生と昨年度の12月にお別れをしました。今は人材不足など、様々な事情でメヒア先生にはご都合を付けていただき、12月まで指導をして頂きました。

しかし、12月22日の終業式の日には任期を終え、アメリカのカリフォルニア州に帰国しました。

英語の指導はもとより、人間的にもとても素晴らしい魅力をもった先生だったので、多くの生徒が別れを惜しみ、泣いていました。

メヒア先生の教えを忘れず、今後もジーン先生と一緒に学んでいきたいと思っています。

12月22日(金)終業式の後で、メヒア先生とお別れ会をしました。



中山先生に通訳をしていただき、メヒア先生の思いを伝えました。メヒア先生も泣いていました。



最後に生徒から「英語の合唱」のプレゼント



お別れの最後に記念に集合写真を撮影しました

教育長から辞令を頂くメヒア先生



道志村を去るメヒア先生



道志村を去る最後まで「道志村は良かった！感謝している。また、来村する」と言っていました。

本校の実践が日本教育新聞で全国で紹介されています ③

く3回目>

次世代リ＝ダ＝を育てる

④

杉本 賢二

山梨・道志村立道志中学校校長

いじめ対応で「三助法」

今回は、学級の安定を確保するための「いじめの対応」についての取り組みを紹介する。

いじめは命に直結する人権侵害であり、業務の最優先事項として組織対応している。いじめを巡っては、定義が「被害者の主観であることから「いじめゼロ」を目標として、生徒や教職員が申告できない被害の可能性も高まる。

そこで本校では、いじめを自然災害と同様に必ず起こることと捉え、「自助」「共助」「公助」の「三助法」で対応し、「いじめによって死を選ばせない」ために被害を最小限にする「減災」の考えを実践している。

まず「公助」では、信頼性と説き性が高い心理検査を活用し「安定と活性化」を両立した学級を基盤とし、全教員の言語活動でもいじめ防止を推進している。半信目標をかなえる目標設定から各自が自分の考えを形成し、対話の過程では、思いを大切に「お互いを承認する」というルールを定着させている。知的交流による人間関係の質の向上は、教育効果を高める課題

必ず起きる一自然災害と同様に考え「減災」

を予防する。また、早期発見を毎日の観察(面接)調査で進めている。いじめの対応は、道志中学校を中心とした対策会議で事業関係を築く、方針を共有し、他機関とも連携する。教育委員会には「報告入れ、24時間以内に報告書を出す。再発防止は必ず100%以上観察・調査を継続する。

「自助」では、自分の命を守るために自分の置かれた環境や心身の状態に気づき、知識や技能を活用して適切に判断し主体的に危険を回避する力を養成している。何よりも重要なのは「早期に相談することである。

「共助」では班を基盤所としながら、いじめ減災への貢献を推進している。いじめは「傍観者」の存在があって成立する。傍観者も加害者を守るために、傍観者とならないための教育を推進している。生徒も文藝部の「全国いじめ問題子どもサミット」や、学んだ知識や技能を生かして主体的に活動している。

さらにPTAでもいじめ防止力を生かしている。PTA役員からは「いじめが起これば」と思える学校となり、対応についても信頼していると評価されている。

日本教育新聞 1月17日、8日号